
迷い子の道標

C.F.M

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

迷い子の道標

【Nコード】

N7640K

【作者名】

C・F・M

【あらすじ】

図書室にあった一冊の本。それを手にした私はその中であつたおまじないを試すことにした。ここではないどこか、自分の心にある本当の願いを知るために。

場面 1

【深夜一時。駅前の歩道橋。左から上れば過去が、右から上れば未来が見える】

・・・そして、歩道橋の真ん中で、“彼”に出会えば、ここではないどこかへ、連れて行ってもらえる。

冬の澄んだ空気は、私の息を白く染めていた。

彼は私に向かって右手を差し出していた。

それは一緒に行こうという意味だと私にはわかっていた。

私はそれに対して一步を・・・。

放課後のチャイムが鳴る。気だるい声が辺りに満ちて、解放された若者たちが自分たちの世界へと向っていく。まあ、私も若いのだけれど。

「で、なにボーっとしてんだ？唯？」

ああ、いけない。声を掛けられてしまった。私はノートで自分の顔を隠してみた。

「・・・何の意味があるんだ、それ？」

ヒョイと人のノートを奪う酷い奴の名前は八島夏。短髪で黒髪、ついでに引き締まった体躯をしている。中学までは陸上をしていたのだが、飽きたと言って今は空手をやっている。だけど、どこで習っているのかはどうにもこうにも教えてくれない。なにやら秘密めいていてあれなのだが、どうやら努力している所を私に見せたくない

いということらしい・・・ということに最近気づいた。

ふふ、そんな背伸びをしていても、背は私の方が少しだけ高いのだ。なんて、変な言い回しだけど・・・夏はさっぱりした性格なのに、背のことを気にしていたりするのが面白い。

でも、からかうと人の頭を平気で小突く。手加減はされるのだが、少々痛い。

「なにをにやにやしてるんだ？」

ああ、つい顔に出してしまっていた。

「なんでもないです。ええ、これから図書館に行くので、この辺で考えていたことを見透かされでもしたら、私は頭に三段重ねのアイスを作る羽目になる。」

「あれ？今日は一緒に帰れるんじゃないかなかったつけ？」

おや、そうでしたっけ？でも、本は今日が返却期限なのでした。

うゝむ、年の所為かな？

「すまないねえ、埋め合わせは次の機会に・・・」

などと言うと夏は呆れて隙が出来た。そこを狙ってノートを取り返す。後は鞆を持って・・・よし、大丈夫。

「最近付き合い悪くないか？」

無二の親友の私をお疑いとは、まあ、仕方ないんだけど。

「冬だから」、それが君に告げられる理由だ」

あ、苦笑いだ。些か芝居がかり過ぎたかもしれない。意味不明な発言で煙に巻くのは止めたほうが良かったかもしれない。たまにしかやらないから慣れていない。たまにはやるのかと、どこから突込みが入りそうだ。

「ま、なんにせよ、困った事や悩み事があつたら聞くからな、それだけは覚えていてくれ」

夏は真剣な表情でそう言ってくれた。今時なんて暑苦しい奴だ、と感謝しながら心の中で茶化してみた。いや、恥ずかしいし。

「了解してます」

私は敬礼を返して、足早に教室を出た。これも照れ隠し・・・い

やいや、さつさと本を返しに行かないといけないからね。

君の優しさは嬉しいけれど、だからこそ君には話せないこともあるのだよ？

静かな空間は私の大好物だ。色々と思考が飛んでいくのを感じる。こういうところで夏と一緒に居ると、夏は二人で居るのに一人で居るみたいで寂しいと言っけれど。まあ、それはお互い様だ。私はスポーツをしている夏を見てる時、同じように感じているのだから。割と貧弱な私の体は運動に対して抗議の声を上げる。散歩は好きなのだけど、ジョギングはかなりの無理で、ランニングは自殺行為だ。精神的なものも多分にあるんじゃないかと自分では思っているが・・・特に体を鍛えたいというわけではないし、日常生活が営めれば御の字だ。

カウンターで借りた本を全部返却し、私は次の本を物色する。図書館は私の心のオアシスだ。ここには私の“知らない”がまだたくさんある。

ちなみに私は本を選ぶ時、資料として必要な時以外はそれを選ぶ理由を考えないことにしている。“ただ、なんとなく”それが心が求めるものだと思うからだ。前に来た時にあらかじめ目星をつけておいた本を四冊と、ふと手に取った一冊の合計五冊をカウンターへ持っていく。

「あら？これ図書館の本じゃないわね」

貸し出しの手続きを眺めていると、司書さんの手が不意に止まった。確かにその本にはシールが張っていなかった。

「そうなんですか？」

司書さんは不思議そうにしているが、問題はそこではない。この本を借りて読むことができなくなったということだ。むう、困った。『・・・もしかして、読みたい？』

なんだか悪巧みを思いついた良い顔だった。顔なじみではあるが、こういう顔を見たのは初めてだ。なんだか貴重なものを見た気がする。

「それはもちろん」

共犯者の笑みを浮かべる私たち。うん、人が少ないからこそ出来る芸当だ。見られたら確実に不審者と見做される。

「貸し出すことは無理だけど、こっそり読んでいきなさい。読み終わったら私が預かるから」

それはまあ、誰かの忘れ物だろうしね。

「ありがとうございます」

私は本を受け取ってこっそり本が読める個人用の席へ向った。

シールが張っていなかったのは何気なく取った一冊だった。こういう出会いは私の経験上結構当たりのことが多い。ものすごい外れの時もあるけれど、それはそれで面白いから構わない。じゃあ、なんだって良いのかと、ふと省みる。いや、中途半端な作品は・・・あれ、それもやっぱり楽しんでるな。よし、深く考えないようにしよう。

古い茶がかった革の装丁を開き、中を見てみると、不思議な話が集められた本だった。伝承や占い、それからおまじないにまつわる逸話。結末の無い話もちらはら存在した。

そうして私は本を読み終わった。そして、載せられた話の中からひとつだけすぐに試せるものがあることに気づいた。

とても簡単で、とても胡散臭いそれをなぜか私は試す気になっていた。

それは、多分無駄なことだからだろう。

意味のあることばかりをしていると、人は何かを見失ってしまう

ものだ。

・・・まあ、後で意味づけることはいくらでも出来るから、世界には意味があることしかないとも言えるし、だから、人は常に何かを見失っているのかもしれないのだけど。なんて、適当に考えて、これも無駄だな、と私は少し笑みを浮かべた。

司書さんにお礼を言って、私は読み終わった本を返し、家路に付いた。

家に帰ると姉が煙草を吸いながらだらだらしていた。ソファに背中を預けて、ついでにイチゴ牛乳を左手に持って時折ちびちびと飲んでいる。格好は紺のジーパンに黒のＴシャツという冬にはありえない寒そうな格好だった。部屋は暖房が効いているので寒くはないのだろうけど、微妙に無駄をしている気がする。こういう無駄は私の好みじゃないけど、姉には似合っているのととりあえず許容しておく。

「今日は早いね」

仕事で遅くなることが多いので、そう聞いたら拗ねられた。膝を抱えてほっぺをふくらますのは止めて欲しい。まるで似合っていない。

「なにさ、遅い方が良かったっての？」

子供じみた態度だなあ、と思うが、家の中限定だから良しとする。姉は外ではビシツとしているのだ。周囲からはかっこいいと評判・本人は可愛いと思われたいらしいが、ままならないものだ。

「いや、珍しいから」

今日は夕飯も作ったのに、とソファに転がりながら愚痴を言う姉に適当に謝って二階の自分の部屋へ。今日の夕飯はほぼ確実に、煮込み料理だ。姉は煮込み料理が大好きだから、カレー、おでん、

シチュー、ついでに味噌煮込みも得意料理のレパートリーに入っている。なんでそんなに煮込みが好きなのか聞いたことがあるが、その際の言葉は「ロマン？」だった。首を傾げながら言われても意味不明だ。結局好きなものは好きってことで納得した。

夕飯までは少し時間がある。私は着替えてベッドに寝転がった。そして、借りた本はどうしようかと思いつながら少しうとうとした。

場面 2

今日は月が明るかった。そろそろ満月だろうか。時刻は一時少し前。私は近くの駅前にある歩道橋の前に来ていた。歩道橋は高さが電車の路線とほぼ同じなので、走っていく電車をすぐ近くで見ることが出来る。まあ、私にはあまり意味の無いことだけど、夏は入場料を払わないで電車が間近で見れるじゃないかと嬉しそうに言っていた。よくわからない感覚だ。多分冗談だったのだろう。

「そろそろかな」

腕時計を見る。午前一時まで後十秒ほど。私は心の中でカウントして歩道橋を上り始めた。

【深夜一時、駅前の歩道橋、左から上れば過去が、右から上れば未来が見える】

別に信じたわけじゃなく、夜中の散歩のちょっとした味付けを楽しむつもりだった。

図書館で気まぐれな出会いをした不思議な話を集めた本。

そして近くにそれに該当する場所があったこと。

それを試す気になったこと。

偶然というのはどこか仕組まれているような、そんな感覚を受けるものだ。

歩道橋に足を掛けた瞬間、景色から音が消えた。

ゆっくりと一歩ずつ足を踏み出して、階段を上りきったとき、私は彼に出会った。

柔らかな髪の色と、どこにでもありそうな学生服、少し胡散臭い笑顔。

「美人だから信用されないタイプ？」

初対面なのに私は気安く話しかけた。彼のような存在に気兼ねを

しても仕方が無いとそう思ったからだ。

「そう、それが悩みでね」

気障な仕草で彼は答えた。透き通るようなその声音も、やっぱり胡散臭かった。

彼には名前がないらしい。どこにでもいて、どこにでもない存在。ああ、なるほど、ここではないどこかへ誘うのにはお誂え向きの設定なのかもしれない。

「あれとか、これとか、それとかって呼ばれるんだ？」

それは面倒なのか、楽なのか、よくわからない。

「せめて、彼とかあなたとかで呼んで欲しいかな？」

確かに呼ぶのに適しているのはそれくらいだ。うん、別の意味でも捉えることができそうだけど、それは邪推というものだろう。

「じゃ、その彼さん。私は左から上ったわけですが？」

話の通りなら、過去を見せてもらえるはずだ。

「酷い呼び方だなあ。まあいいけど、で、君は過去を見たいのかな？」

だから、そう言ってるのに・・・って、そうか、確認は必要だね。

「試しにね。未来を見るのは・・・まだ、恐いからね」

予想はある程度しているけれど、それが確実だと言われるのはやっぱり恐い。でも、私はそれを見てみたい気もしているのだから、不思議なものだ。

「なるほどね、と、そうだ、過去と言っても見せてあげられる過去は人によって違うんだ」

それはそうだろうけど・・・うん、あ、もしかして、世界の過去や、他人の過去を見るのもありなのか？過去が見れるって言うだけだし。

「ええと、私の場合は？」

彼は目を閉じて、なにか思案していた。

「君の場合は・・・うん、君自身の過去だね」

大仰な仕種で彼は頷いた。なんで、そう芝居がかっているんだろう。

「そう、丁度良かった。それなら効果を試すのにぴったり」

自分の過去なら記憶と照らし合わせて検証も出来る。

「それじゃあ、呼ぶよ」

彼が左手を上げて招く仕草を見ると、私の右手側に陽炎のように電車の路線が現れた。現実の路線は左手側に存在しているから、これは映し身ということだろうか？

「過ぎ去ったものは、捉えどころが無く、現実の向こう側にたまたうもの。でも、こうすれば、はつきりと見えるだろうか？」

・・・記憶と記録の違いってことだろうか？

「ま、それなりにね」

流れていく電車には、私の過去が乗っている。それが何故か私にはわかった。

「手厳しいね。ま、いいか。お膳立てはしたからね、後は君が満足行くまで見れば良い」

両手を広げて降参の仕草をする彼。どうしてこう胡散臭さを助長するような真似をしているのだろうか。

「案内は無し？」

一応案内されたような気もするが、後はどうぞというのは投げやりな気がする。

「過去は君のものだからね。未来なら、案内役は必要かもしれないけれど、それも人によりけりかな」

そういうものなのだろうか？

とりあえず、私はおぼろげに浮かび上がっている電車、私の過去をじっくりと眺めることにした。

夏と出会ったのは父方の祖母の家で過していた時だった。

体が弱く、外へ出ることが出来なかった私は庭先を眺めながら日々を暮らしていた。

ある日、夏は悪戯をして逃げる時に私の前に現れた。

匿ってくれと頼まれたので、私はすぐに承諾した。

人と触れ合う機会なんて滅多になく、私は退屈していたのだ。

それに元気な夏の姿は、私になりたかった理想だった。

だからその時、思わず頷いたのだらうと今ならわかる。

夏を探す声が遠ざかり、それから私たちは互いに名乗りあった。

そして自分たちの話をした。といつてもこの時したのは自己紹介程度だ。聞いたのは名前と、なぜか話題に出た家族のこと。夏は私の遠い親戚だった。しばらくこちらに滞在するからまた遊びに来ると夏は約束して私たちは別れた。

それから二日後。夏は約束どおりに遊びに来た。すぐ来るつもりだったらしいけれど、悪戯の所為で外へ出ることを禁じられていたらしい。

その時に私は夏に贈り物をもらった。騎士とお姫様が活躍する一冊の本だった。夏は騎士が好きで、私はお姫様が好きだった。きっと、誰かを守るくらいに強くなりたいと夏は思っていて、私は誰かに助けて欲しいと願っていたからだろう。

しばらくの間、夏と過す日々が続く、そうして休みが終わり夏は家族と共に帰って行った。再会を約して、私たちは一人に戻った。私はまだまだ病弱なままで、それでも、いつかの再会を思い描くと元気になれる気がしたものだ。

思い立ったのはいつだろうか。

約束の証に本を置いていつてくれた夏に私もなにかを贈ろうと決意したのだ。だけど、体力をあまり使わずに出来るもので、すぐに休憩が取れるものでなくてはならなかった。夏の顔を思い出して、その食欲を考えると・・・夏はお菓子をたくさん食べていた・・・料理を真っ先に思いついたが、それは無茶だとすぐに断念した。台所に長時間立つていられるほど、まだ私の体力はなかったのだ。だから、編み物をすることにした。疲れたらすぐに止めて眠れるし、室内で出来る。それは私が望む条件にぴたりと嵌っていた。その時、たまたま私の様子を見て来ていた母に早速用意を頼むと、なぜか妙に心配された。あれは私の体を心配してだったのか、別の意味があったのか、当時の私にはわからなかった。今では少しその気持ちがわかる。それでも、私がなにかをやりたいと言うのは珍しいことだったので、すぐに頼みを聞いてもらえた。その日から練習を続けて・・・翌年、夏に手袋とマフラーをプレゼントすることが出来た。夏は凄く感激して喜んでくれた。作品は思ったよりもサイズが大きかったので、少しぶかぶかだったが、すぐに大きくなるから大丈夫だと夏は笑っていた。そう、私の想像する夏は本当の夏よりも大きかったのだ。それは、多分、私にとっての夏の存在の大きさが反映されたのだと思う。

編み物で体力がついたのか、それとも年を得れば良いだけだったのかはよくわからないが、私の体は徐々に元気になっていった。短い時間の散歩なら許可が下りたので、私は夏と一緒に散歩を楽しむようになった。その頃、ようやく母にちゃんと夏を紹介した。母は夏を知っていたが、私のところにこっそり遊びに来ていることは知らなかったようだ。いや、それとも知らない振りをしてくれていたのかもしれない。なぜか、そう思ったのだが、根拠は無い。あの時のかしこまっていた夏は少し面白かった。

それから、もう玄関から訪ねても大丈夫なのに、夏はずっと縁

側からやって来ていた。ポリシーとかいうものらしかったが、私には意味がわからなかった。ポリシーが何なのか今の私にはわかるが、やっぱり意味はわからない、ということにしておこう。あれはもしかしたら、夏の氣遣いだったのかもしれないから。

小学校に入る頃、日常生活が出来ると判断された私は祖母の元から自分の家に戻るようになった。祖母は折角元氣になったのにと残念がったが、毎年遊びに来ることを約束してどうにか宥めた。今でも月ごとに手紙をやりとりしている。

一緒に暮らし始めてしばらくは姉との間が少しぎこちなかった思い出もある。たまに祖母の家に来ていた時も、姉は私との距離を測りかねていたから仕方が無いだろう。それは私がいつ死んでもいいように自分で距離を空けていたからなのだが、姉は自分が悪いと思っていたようだ。一緒に暮らし始めて一年くらいして、なんとなく話の流れでそのことを話したら、氣が抜けたようになっていた。もうそんなことは考えてないよな、と聞かれた私は素直に頷いたのを覚えている。

小学校では夏と再会した。近くに越してきたと夏は話していて、当時私は誰が氣を利かせたのだろうと思ったものだ。もともと、実は前から近くに住んでいたということに気づくまでその冗談に私は騙されていた。二年くらいもの間もだ。いや、まあ、騙される私も私だが。

私は病弱ではなくなっただけで、体力は平均より低かった。身体つきも細かったのでよくいじめられそうになったものだ。夏が毎回駆けつけてくれていなければ、そうなっていただろう。

そうして日々が過ぎて、私たちは中学生になった。夏は足が速かったので陸上部に入部した。確か、私が困った時にすぐ駆けつけられるように本格的に鍛えるという理由を聞いた氣がする。嬉しかったけれど、情けなくもあった。まあ、これも冗談だったのかもしれないが、真偽は確かめていない。

私は趣味で編み物を続けていたし、その頃から良く本を読むよう

になっていたので部活には入らなかった。

そういえば、夏は部活を始めてから成績が落ちて、私が勉強を教えるようになったのだったつけ。それから・・・中学の終わり頃、私が殴られる事件が起きたのだ。受験でピリピリしている中で、推薦が決まっていた私はのんびり読書をして過していた。図書室で静かに本を読んでいただけなのだが、今思えばその時、私は少し笑い声を漏らしたかもしれない。ちょっと面白い台詞があったのだ。まあ、それでガタツと立ち上がる声と、こちらに向かってくる足音が聞こえて、近くにそれが来たので、私が顔を上げたらこちらを睨みながら見下ろしている女生徒が立っていた。相手の言い分は真剣に勉強している奴がいるのに、不真面目だとかなんとかさういうものだった。要するに私が余裕を見せびらかしていて気に食わないということだったらしい。そんなつもりはまったくなかったし、そもそもここは本を読むところではなかったかと思つたが、定期的に無神経だったと後で反省した。しかし、その時はなぜか口が滑つてしまった。楽しんでいる時に無粋な横槍を入れられたからかもしれない。

「余裕が無いのはあなたがサボっていたからでしょう？人に責任を押し付ける前に努力をしたらどうですか？」

・・・言つた後に気づいたが、これでは誰だつて怒るだろう。余裕が無い時ならなおさらだ。泣きながら殴られたのは生まれて初めてだった。ちょうど待ち合わせをしていて、夏が止めてくれなかったら、もっと酷いことになっていたと思う。口が滑つたとは思つたが、謝るのも今更なので、私にはどうしようもなかったのだ。

その事件の後、夏は部活を止めた。受験前でも本当ならもう少しだけ出来たはずなのに、走っている夏は楽しそうだったのに・・・私を守るために、ずっと側についているために、夏は・・・。

「泣くほどの気持ちか、羨ましいね」

不意に記憶は途切れて、私は歩道橋の上に立っていた。頬に手を当てれば、涙で濡れている。

「なんで・・・？」

私に泣く資格は無いのに。夏がなによりも自分を選んでくれたことを嬉しがっている自分には……。

「真実の気持ちほど身勝手なものさ。それに、君が見るべき過去は……もつと違うものだ。僕は思ったけれどね」

ああ、彼にはそれもわかってるのか。

「大丈夫、それはもう覚悟していることだから見る必要はないの。ただ、私は自分の罪をちゃんと見たかっただけ。自分では、思い出したくなかったから」

それは矛盾だ。きちんと覚えているから、思い出せるのだから。でも、私は思い返そうとすると、記憶を振り払ってしまう。資格が無いことを忘れていたいから。

「単純なのか、複雑なのか、判じかねるけれど、これで君は目的を達成できたのかな？」

彼は胡散臭い笑顔で、不思議そうに尋ねた。ちぐはぐで、でも、妙に彼には似合っているように感じられた。初めの際は違和感があったのに、今ではそれはまったく気にならない。

「ええ、ひとまずは」

私は罪を思い出した。それはもしかしたら、人によつては罪とは呼べない、ほんの些細な事かもしれない。でも、私にとっては大きな罪なのだ。そう、償うべきものなのだ。

「だけど、君はここではないどこかへ行きたいと願ったはずじゃないかな？」

私は、ただ笑顔だけでその質問に答えた。

「……なるほど、どうやら分の悪い賭けになりそうだ」

私は別れを告げて階段の方へ向った。

「明日は、右から上るわ」

それだけを告げて。

場面3

その日は休日だった。私は起きて朝食をとって、後はずっと借りた本を読んでいた。高校に入ってから土日はずっとそんな感じだ。それは夏が土日はずっと家にいないからかもしれない。誘導尋問をして空手を習いに行っているらしい事は判明したけれど、それがどこなのかはわからない。勉強も今は教えることもなくなった。まあ、それは私に悩みがあるということも・・・関係しているということにしておこう。

少々目が疲れたので、寝返りをうつて天井を見上げた。本は途中を開いたままお腹の上に置く。どこか、集中していない感じがする。本の内容は面白いと頭で判断しているのに、感情がそれについてきていない。

ここではないどこか・・・やっぱり私は逃げているのだろうか？いや、決着をつけると決めたから、私は試してみようと思ったのだ。

彼と会うことがなくても、私は最初からそうする気だったのだ。・・・そうか、気持ちが宙ぶらりんなままだから、楽しめないんだ。

ようやくそのことに気づいて、私は本を閉じて枕元に置いた。すべてが終わったら、また本を読もう。

その時は・・・私が私であると言える。そんな自分で居たいと思った。

ほんの少しだけ欠けていた月が満ちた。今宵は満月。照らされた光に映る影はスカートをなびかせる私を切り取っていた。

「一時まで後十秒」

カウントをして、私は階段に足を掛けた。

景色から音が消える一瞬、私は自分の名を呼ばれた気がした。振り返っても人影は見えない。そうだ、ここはもう、日常の空間ではない。例えすぐ側にいたとしても見えるはずが無いのだ。

私は彼の元へと向った。

「よく来たね、待っていたよ」

彼の出迎えに、私は微笑みを返せなかった。

覚悟はしていたけれど、しているつもりだったけれど、未来に對峙するのは・・・やはり、恐い。

「くそ、目の前から消えるなんて見間違いだと思ったのに」

唯の夜の散歩に付き合い始めて一ヶ月になるが、最初の驚きからようやく落ち着いてきたところだったのに、二日連続で驚かされることになるなんて・・・。

とにかく、歩道橋で消えたのだから、そこに鍵があるのは間違いない。

私は歩道橋に足を掛けた。

不意に音が消えて、感覚が遠くなった。

「なんだ？」

辺りを見回すと、今までそこには居なかったはずの唯と、もう一人の人物の姿があった。

そこに駆け寄ろうとするが、なぜか、階段を上ってもそこへ近づくことが出来なかった。

「さて、君がここへ来たということは、未来を見たいということ
でいいんだよね？」

私はその言葉に静かに頷いた。前も同じように尋ねられたのを思
い出す。これは多分儀式の一種なのだろう。

「でも、君は未来を見る必要はないと思うんだけどね？」

それにも私は頷いた。そう、どんな未来が待っているかはある程
度予想がついている。

だけど、確認したいと思ったのだ。足掻くかどうかを決めるため
に。

「わかった。君に見せられる未来を見せよう」

私は病院のベッドで寝ていた。色んな機器に繋がれて、そこに存
在するためのモノになっていた。夏はそんな私に優しく声を掛
けていた。

私の息が止まった時、夏はその病院の屋上から飛び下りた。

私は祖母の家で療養をしていた。もう長くないことは自覚してい
た。だから、夏を遠ざけた。私の死に、夏が縛られるのは嫌だった
のだ。でも、その日、夏は私に会いにやってきた。起き上がること
の出来ない私は視線だけを動かして夏を見ていた。夏は寝ている私
を見るなり謝った。そして、私の胸を刺した後、自分の胸も貫いた。
血が辺りを染めて、重なり合って私たちは死んだ。夏は私を忘れて
しまうかもしれないこと、そしてなによりも置いていかれることに
耐え切れなかったのだ。

・・・それから、見せられる未来で私が死ぬたびに、夏も死ん

だ。

「・・・これは、見せられる未来って言ったわよね？」

見終わった後、私は彼に尋ねた。そこには死の未来しかなかった。確かに生きている限り、死が待っているだから、未来とは死ぬ瞬間のことなのかもしれない。でも、予想通りの私の死に、夏まで巻き込むのは嫌だ。どうして、夏は私の死に引きずられるのだろう。

「ああ、未来は走る路線が決まっていないものだし、だからこそ、まだ存在しない路線も少なからずある。人はその存在しない路線を希望と呼んだりするね」

希望はまだ存在しないから、見せることは出来ないということなのか。

「私が死んでも、夏が生きる未来は？」

それがあるなら、私は喜んで選ぶ。

「現時点で君の未来の中には存在しないよ」

だから、見せることは出来なかった。つまり、そういうことだ。

「じゃあ、二人とも生きる未来は？」

もつと確率の低い希望だ。でも、問わずにはいらなかった。

「それも、まだ存在していないね、とても残念だけれど」

彼が言っていることは本当だろう。これは私自身が感じていることでもあるのだから。私は、死の運命を強く背負っている。今まで生きて来れたのが不思議なくらいだ。夏と出会わなければ、あの六畳間がすべてでその人生を終わらせていたはずだと、私は思っている。

「僕が知っている方法はひとつだけだ。ここではないどこかへ、君を誘うこと。そうすれば、二人とも死なないで済むし、もしかしたらもうひとつの問題も解決するかもしれない」

彼は胡散臭い笑顔を止めて、真剣な表情で言った。

「ここではないどこか・・・？」

確かに私はそれを望んでいたが、はたしてそれは私が見てみたいと思った未来なのだろうか。

「そこでは、そう、例えば君の性別が入れ替わる。死の運命を変えるにはそれくらいのことをするしかないからね。さあ、どうする？」

彼は私に手を差し伸べた。

私は目を閉じて、思案する。

魅力的な提案だと思う。二人とも生きていて・・・性別の問題も解決するのだ。私はずっと女性になりたかった。男である自分に違和感を覚えていた。

でも、それは自身を否定することだ。そんな自分が夏を好きでも意味がない。

だから、私は一步・・・後ろに下がった。

「答えは出たようだね。もっとも最初からわかっていた気はするけれどね」

幾分か、彼は寂しそうだった。表情は胡散臭い笑顔に戻っていたが。

「違う世界で幸せになるのは何か違う気がしたから、ここで精一杯足掻いてみるわ」

それは、多分初めから決めていた覚悟。死ぬ覚悟の方ではなく、自分でも気づかなかった未来へ向かう意志、それを持っていることに私は気づけた。それはなんだかおかしいことだったが、彼のような存在がいるのだ。別に普通のことなのだろう。

「まだ見ぬ路線を作り出すことを選んだというわけだね」

彼はなにか眩しいものでも見るようにその目を細めた。

「ええ、希望に縋ってみつともなくても這いずってでも前へ進むわ」

そう言うと、彼は笑った。あの表情ではなく、子供のような純粋な笑みだった。

「なんだか、そんな人間ばかりがここへ来る。ここではないどこ

かへ行きたいと願う人にしか僕は見えないっていうのにね」

おどけた仕草だけれど、彼は多分悲しんでいた。でも、仕方ない。ここではないどこかというのは、きつと……。

「唯！」

大声で私の名を呼んで、夏が私の前に立った。いつの間にここへ来たのだろうか？

「おや、騎士の登場か……でも、遅かったようだね」

彼の言葉を聞いて、そうだと思った。やっぱり、夏は凄い。騎士はどこへいても、姫のもとに駆けつけられるのだ。

「なんだと！」

必死な夏に私は後ろから抱きついた。

「確かに遅かったかも。だって、もう、話は終わったし」

私は素のままの自分で夏に語りかけた。

「へ？え？一体、どういうことだ？」

状況と、私の態度に夏は困惑したようだ。

「つまり、邪魔者は退散するってことだよ。唯くん、それじゃ、もう二度と会わないことを祈ってるよ」

彼は大仰な仕草で一礼してふわりと浮き上がった。そこで気づいた。私は彼の名を問いかけたのに、私自身は名乗っていなかったことに。もつとも、それも彼の狙いだったのかもしれない。

「じゃあ、私はまた会えることを約束しておくわ」

手を振って、宙に溶けていく彼を見送った。夏は事態が飲み込めなくて、ただ呆然としていた。

それから、私は夏に事情を説明した。歩道橋はまだ魔法が掛かっているようで、周りは静まりかえっていた。もつとも、解けていたとしても時間が時間だ。静かなのは普通のことだったのかもしれない。だけどその時、私たちは世界で二人つきりだったのだ。それは

とても贅沢なことだと私は感じていた。

「それにしても・・・私って情熱的だったんだなあ」

夏はなんだか他人事のように言っているけれど、私が未来を見たときに知った事実、そして、今夏がここにいる理由。少なくとも情熱的であるかどうかは別にして、私はかなり大切にされている。なぜか過去を見たときにはわからなかったのだけど、夏は私の姉に頼まれて、私の深夜の散歩をずっと護衛していたのだ。深夜の散歩は私の趣味・・・ではなくて、答を出すため、というか今思えば先延ばしにしていたのだけど、一月くらい前からしていたことだ。悩みに決着をつけようと空の星を眺めながら。

「夏の側で死を受け入れるか、夏を遠ざけて死ぬかしが最初は思いつかなかった。だけど、死を前にして、自分がずつとなりたかった姿を試してみようと思って、そうしたら・・・」

「足掻く決心がついたんだ？」

夏は私の話を素直に聞いてくれた。そして、未来の話をしたとき、自分だったら確かにそうするかもしれないと肯定した。それは、よく考えれば愛の告白と一緒になんだけど、夏はそれに気づいているのだろうか？

「うん、私は女性にずつとなりたかった。そして、恋人として夏とずつと一緒に居たいんだって、はつきり気づいたから」

夏はなんだか困っているようだった。

「愛の告白は、迷惑だった？」

その可能性はかなり低いと思ったけど、私の願望だったかな？

「あ、いや、それについてはまったく困ってない。私も唯が好きだし、ずつと一緒に居たいと思ってる。ただ・・・唯って女性の姿だと私より美人で・・・なのにどうして自分がドキドキしてるのかと・・・」

ああ、なるほど、そういうことか。私だって夏を見てドキドキしてるのだからお互い様だと思っただけだ。

「夏みたいに自前の胸はないけどね」

そこは少々羨ましい。今はジャケットで目立たないが、夏の胸は結構大きいのだ。

「それに、好きな人を見てドキドキするのは別に变じゃないですよっ？」

夏が男の子だと勘違いしていた時の気持ちを引きずっているのかもしれないと思うこともあるけど、私は女性の姿を自然だと思い、そして夏という女性を愛しているのだ。

「あゝ、まあ、そうか、そうだな」

こんな論理に納得する夏。結構単純だ。まあ、そこも好きな部分ではあるのだけれど。

「それにしても、私が女なのに、唯が女性になりたいってのがなあ……」

ああ、やっぱり変だと思うか、まあ、わかりきっていたことだけだ。

「夏は私の騎士でしょ？だから、私はお姫様になりたかったの」「綺麗になる努力もしてきたのだ。まあ、でも、スカートを穿いたのは今日が初めてだ。もっとも、想像の中ではドレスなんかも着ていた。」

「うゝん、出来れば私も唯のお姫様になりかったんだけど……」
「……それは初耳だ。しかも、考えたこともなかった。ということとは、これがもしかしたら、別の路線なのだろうか？」

「じゃあ、たまには交代するってことでどうかしら？」

騎士の代わりが務まるとは思えないから、お姫様に守ってもらうしかないかもしれないけれど、それはそれでありだと思う。夏は私の提案に呆れながらも頷いてくれた。

……ここではないどこかへ、行きたいと願ったのは本当。

歩道橋で彼と出会い、自分に素直になると決めた私。

ここではないどこかとは、逃げるための場所だけじゃなく、未来へと続く道のこともあるのだ。

だから、彼はずっと一人ぼっちだ。そして、そうなるようにあの胡散臭い笑顔を振り撒いているのではないか？

私はそう思った。

なんだかんだで恋人同士になった夏と私。いや、言い方があれだけど、まあ、照れているということにしておこう。そして、今日は休日だ。デートのためにおめかしをして、私は居間へと下りていった。煙草を吸っていた姉が、驚いて口から煙草を落とした。火をつける前で良かった。

「あ、あんた・・・唯？」

いつものようにかっこいい姉を驚かせて、私は会心の笑みを浮かべた。

「そうだよ、ね、これ似合うかな？」

くるりと回ってスカートをなびかせる。さて、感想は？

「あゝ、少なくとも弟には見えない。てか、何？私はどう反応すれば良いの？」

うつむ、驚くのが先に立ってまともな意見じゃないなあ。

「今日はこれから夏とデートなのですが、それについては？」

そう言うと、姉は今度はズボンのポケットを探って財布を取り出した。んん？

「はい、デート資金のカンパ」

渡されたのは二千円。つまり、千円札が二枚。ありがたいけど、どうということだろう？

「あんたと夏がくつつくかどうか母さんと賭けててね。勝ったからお裾分け。頑張つて来なよ」

賭け・・・という経緯でそんな話になったのか、今度聞き出さないと。

姉に送り出されて、公園で待っていると、ようやく夏がやってきた。いつもながら、男前だ。言うど怒られそうだけど。お姫様志望の騎士様に私は明るく挨拶をする。そういえば、私は夏を彼女といえいいのか、彼氏といえいいのか、どちらなのだろう？

「はあ、それにしても唯、綺麗過ぎ。彼氏が彼女より美人つてどうなのよ」

・・・夏は明確に判断しているようだ。そうか、私が彼氏か。では、彼氏らしく彼女と腕を組もう。押し付ける胸は無いけれど・・・、あれ？

「で、どこに出かけるつもりなの唯？」

歩き出してすぐにそんな問いかけ。まったく、無粋だなあ。

「夏と一緒にどこでもいいわよ。まあ、一応デートコースは決めてきたけど」

私は鞆からメモを取り出して夏に渡した。この日のために色々準備はしているのだ。

「あ、本当？良かった、いざとなると何も思いつかなくてさ」

夏の少し情けない声を聞きながら、実は私も緊張していた。一応の下調べはしてあるけれど、夏が気に入ってくれるかどうかはわからない。あえて二人で行ったことは無い場所ばかりを選んだからだ。付き合いが長いと新鮮味のある場所というのは中々探しにくいというところもあるけれど、行ったことの無い場所へ二人で行く。初デートとしては冒険かもしれないが、それが私なりの覚悟だった。

・・・未来はわからない。それでも、希望を持てるように、願いを込めて、私は二人であることの一步を踏み出した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7640k/>

迷い子の道標

2010年10月10日01時35分発行